

富山大学人文学部 平成 29 年度卒業論文

フリースクールの多様性

ーフリースクールの公教育化や制度化を契機としてー

11410177 山浦榛佳

富山大学人文学部人文学科
社会文化コース 社会学分野
学籍番号 11410177
氏名 山浦榛佳

<目次>

第一章	問題関心	1
第二章	フリースクールの現状	
第一節	フリースクールという概念の混乱	2
第二節	フリースクールの公教育化	3
第三節	フリースクールの制度化	4
第三章	調査	
第一節	公益財団法人富山 YMCA 駅前センター	5
第二節	学校法人国際学園 星槎国際高等学校富山学習センター	8
第三節	NPO 法人ワンネススクール	10
第四章	分析	
第一節	受け皿としてのフリースクール	12
第一項	開放的な雰囲気	
第二項	居場所と親子関係	
第三項	教師と生徒の関係	
第四項	友人関係の変化	
第五項	個性の容認	
第六項	まとめ	
第二節	既存の教育制度との関係	17
第一項	在籍小中学校との関係	
第二項	学校との関係	
第三項	進路について	
第四項	まとめ	
第五章	考察	
第一章	フリースクールの多様性	21
第二章	フリースクールの制度化の是非	23
	参考文献・URL	24

第一章 問題関心

文部科学省は 1992 年に「不登校への対応の在り方について」の中で「民間施設についてのガイドライン（試案）」を公表した。それにより、フリースクール等の民間の施設での出席であっても、在学中の学校長の許可があればそこに通うことで公教育機関での出席とみなされるようになった。それから 2002 年に構造改革特別区域法が交付され、特区学校という、より学校に近い存在になることが可能になった。その過程の中でフリースクールは、学校の補完的な存在から代替的な存在へと変化してきた。制度化に対する是非が問われる中、実際のフリースクールはどのような考えでフリースクールを運営しているのだろうか。教育方法や人間関係についての調査を通じ、多様なフリースクールの実態を調査する。

第二章 フリースクールの現状

第一節 フリースクールという概念の混乱

藤田(2002)によると日本のフリースクールは大きく3つの型に分類することが出来る。1つ目は学校にいけない不登校の子供の居場所である。交流や学習としての場所であり、「癒し」や「休憩」といった役割が大きな要素を占める。2つ目は外国のフリースクールを参考にし、独自の教育活動を行う学校である。外国のフリースクールとは、アメリカやドイツのフリースクールを参考にし、学校システムや教育の方法、理念を理解し、それを日本に導入する形式で行われているフリースクールだと定義されている。独自の教育方法で学校教育とは異なる教育を提供し、学校教育の批判とも捉えられている。アメリカやドイツのフリースクールに共通することは、生徒が主体となり学校のルールを決めることや、何をするのも生徒の自由でやることを定められていないという点である。3つ目は塾や予備校といったものである。塾や予備校タイプと外国のフリースクールタイプは根本的に内容やシステムが異なっており相反するものである。不登校の居場所はどちらのタイプにも付随することが多く、また単体でも存在している。

このように大きく3つに分類したフリースクールの関係は、すべてに異なった目的意識や役割が存在するにも関わらず日本ではこれらすべてがフリースクールをして認識され、概念の混乱を招いている。本稿ではこれらすべてを「フリースクール」として扱うこととする。

第二節 フリースクールの公教育化

フリースクールは、公教育化の流れの中で運営形態を変容させてきている。設立当初フリースクールは正規の教育施設として認められておらず、在籍校と二重学籍になってしまい親の経済的な負担が大きくなるという問題が生じていた。そのため文部科学省は1992年に「民間施設についてのガイドライン(試案)」を公表し、民間のフリースクールでの出席を在籍校の出席とみなすことを可能とした。しかし行政から経済的な援助はなく、学割や奨学金の対象にならない等の問題は残されていた。

これらの問題を解決するために、さらに公教育化は進められていった。2002年に公布された構造改革特別特区法を利用し NPO 法人などの民間のフリースクールが私立学校法人として運営可能となった。私立学校法人として認められることは公的な教育機関であると認められたということである。そのため問題視されていた二重学籍、公的な補助金が得られない、学割や奨学金が対象外といった問題は解決することとなった。

以上のようにフリースクールは民間の施設として運営することも、公的な施設として運営することもできるようになった。

第三節 フリースクールの制度化

フリースクールの制度化を求める動きは近年高まっている。フリースクールの制度化とは、民間の施設であるフリースクールが公的に不登校のための学校と認められることである。扱いは養護学校などと同じになると思われる。フリースクールの概念の混乱で指摘したように、どのようなフリースクールかは先行研究では明確に定義されてはいなかったが、義務教育中の不登校について論じられていたため、本稿ではフリースクールの制度化は小中学生を対象としたフリースクールについてのこととする。

文部科学省は2015年に「不登校とは、多様な要因・背景により、結果として不登校状態になっているということであり、その行為を「問題行動」と判断してはいけない」と述べており、不登校像を大きく変化させている。

しかし制度化の実現を巡っては様々な論争が広がっている。田中（2017）では障害児の普通学級へ参加を求める障害者運動の中で「多様な個性が活かされる教育」が、子供の分別につながると批判されてきた歴史があると述べている。フリースクールの制度化に関しても、子供を分けるのではなく普通学級を誰もが通える場所にするべきだという主張がされている。

土方（2011）でも制度化の問題点として3点が挙げられている。1点目は、義務教育期間に既存の学校を選ぶかフリースクールを選ぶか選択の必要に迫られるということだ。中高・小中一貫校と同様に経済的にも地理的にも選択可能な一部の子供が有利になり、教育の機会均等性が歪められる可能性があるかと危惧している。さらに問題点として挙げられているのが、フリースクール内で公教育と公教育外の二分化が生じることである。公教育化を望まないフリースクールが公教育化されたフリースクールと比較され、経済的な援助が受けにくいことや社会的な信用が得にくくなる可能性が今まで以上に高くなるのが懸念されている。さらに考えられるのが在宅不登校の子供に対する影響である。多様な教育機関が増え、それを選択する子供が増えることによって、不登校の子供は「置き去り」感を持つことになるかもしれない。制度化によって経済的な安定や二重学籍といった問題の解消はあるが、以上のような問題点も存在する。

制度化に対し様々な批判がある中ではあるが、東京シューレ代表の奥地圭子は田中（2016）のインタビューの中で、既存の学校で子どもが苦しんでいる以上、懸念があったとしてもフリースクールの制度化を推進するという意思を示している。田中（2016）では、「誰もが通える学校に変えることが望ましいとはいえ、長年の努力によっても達成されていないことを考慮すれば、長期的には学校改善を目指しながらも、同時にすぐに行える方策として多様な教育機会を広めていくことは合理的な判断である。」と結論付けていた。

以上のように制度化の是非が問われる中、実際のフリースクールは制度化についてどのように考え、学校教育と向き合っているのだろうか。多様なフリースクールを調査し、それぞれの学校教育に対する立場を明らかにし、探っていききたい。

第三章 調査

本研究ではフリースクールとして活動している公益財団法人富山 YMCA（フリースクールとフリースペース）、広域通信制・単位制の学校法人国際学園 星槎国際高等学校富山学習センター、同じく星槎グループである NPO 法人星槎教育研究所星槎ふれあいフリースクール「せいさ☆ういず」、NPO 法人ワンネススクール、ワンネススクール内に併設されている通信制高校サポート校ワンネス高等学院の 3 団体 6 フリースクールにインタビュー調査を行った。ここではそれぞれの教育方法がどのようになっているかを明らかにしていきたい。それぞれのインタビュー概要は以下の通りである。

1、公益財団法人 富山 YMCA 駅前センター

インタビュー日時：2016 年 11 月 8 日

インタビュー：公益財団法人富山 YMCA 駅前センター所長 上村香野子さん

2、学校法人国際学園 星槎国際高等学校富山学習センターおよび NPO 法人星槎教育研究所 星槎ふれあいフリースクールせいさういず

インタビュー日時：2016 年 12 月 9 日

インタビュー：代表 高野愛さん

3、NPO 法人ワンネススクールおよび通信制高校サポート校 ワンネス高等学院

インタビュー日時：2017 年 7 月 7 日

インタビュー：森要作さん

それぞれのフリースクールに生徒数やカリキュラムなどの基本情報、学校復帰について、既存の学校教育に対する自らのフリースクールの立ち位置、人間関係についてインタビューを行った。

第一節 公益財団法人富山 YMCA 駅前センター

YMCA は 1844 年イギリスロンドンで誕生し、世界 119 の国と地域で 5800 万人が活動するキリスト教を基盤とした団体で、すべての人びとの全人的な成長を願い、ボランティアとスタッフが共同で様々な活動を行っている。国連経済社会理事会で認められた団体であり、平和、子どもの権利、青少年教育などの分野で国連、赤十字とも協力している。

富山 YMCA は 1951 年に誕生し、子どもから大人までが生涯を通じて成長できる機会の提供として語学やスポーツなどの生涯学習やボランティア活動、野外活動、保育園、アフタースクール（学童クラブ）を運営している。富山 YMCA は富山市堤町と富山駅前の 2 か所にあるが、本稿ではフリースクールを中心として活動している駅前センターのフリー

スクールとフリースペースにインタビュー調査を行った。

まずフリースクールについてだが、5つのコースに分かれており、それぞれ中学生コース、高校受験コース、プレ高認コース、高認コース、大学受験コースとなっている。高認コースやプレ高認コースの高認とは高等学校卒業程度認定試験のことで、高校を卒業していない者等の学習成果を適切に評価し、高校を卒業した者と「同等以上の学力」があるかを認定する試験のことである。

料金に関しては、入学金が 50,000 円、校費が年間 100,000 円で 1 コマあたり 20,000 円となっている。授業料は年間 400,000 円で 1 コマあたり 80,000 円である。

各コースの概要は以下の通りになる。中学生コースは、1 クラス 8 人で全 5 教科から授業を選択する。中学 3 年間の勉強を基本からゆっくりとしたペースで進めたい人向けのコースとなっている。高校受験コースは、1 クラス 8 人で全 3 教科から授業を選択する。高校入試に対応できるよう英語、数学、国語の主要科目を徹底的に学ぶコースになっている。プレ高認コースは、1 クラス 8 人で全 3 教科から授業を選択する。各自のペースやレベルに合わせて個別的な指導を行う。集団授業が苦手だと感じる子供に向けたコースである。高認コースは、1 クラス 10 人で全 14 教科から授業を選択する。高認受験に必要な高校レベルの基礎学力や実践力を身につけるコースになっている。大学受験コースは、1 クラス 10 人で全 14 教科から授業を選択する。本格的に受験勉強をするためのコースである。例として 2016 年度の YMCA の高認コースのスケジュールを表 1 として以下に示す。

表 1 : 2016 年度富山 YMCA 高認コーススケジュール

時間/曜日	月	火	水	木	金
11:00-12:00					
13:00-14:00	数 I	英語	現代国語	科学と人間生活	
14:10-15:10	現代社会	物理(化学)	古典	日本史	英語
15:20-16:20	地理		生物	世界史	地学
16:30-17:30					

この中から 5 コマ以上 11 コマ以内の授業を受講する。多人数での授業では学習指導要領に則り学校と同じ教科書や問題集を使うことが多いが、画一的に同じ教育をするわけではない。子供それぞれのレベルに合わせて授業を行っている。講義形式の授業に加え、フォローアップレッスンという個別形式の授業も受講することができる。フォローアップレッスンは 11:00~21:00 の間の時間に 1 コマ 45 分で行われる。受験対策用に講義形式の授業にプラスして利用する生徒もいれば、相談や運動など様々なことに利用できる。フォローアップレッスンの授業料は入学金が 10,000 円、登録料が年間で 10,000 円、45 分×10 回のチケットが 30,000 円となっている。なお、他のコースと併用してフォローアップレッスンを利用する場合は、入学金と登録料は無料になる。

年代は幅広く小学生から成人している人まで年齢の制限を設けずにやっている。現在中学生コースには 10 名ほど在籍している。他のコースについては、いくつかのコースと併用

して利用している生徒が多いため正確な人数は確認できなかった。カリキュラムは勉強中心だが、学校に行っていないもしくは休みがちな子供を対象としているため、塾や予備校とは異なった子供が集まっている。

学校復帰については、中学生のフリースクール生の約半数が学校復帰を果たしている。中学1、2年生のほうが復帰率が高く、学年が上がるほど復帰はしにくい。学校復帰をしない場合は、YMCA で学びそのまま進学していくことになる。

フリースペースでは料理や運動、作文等のプログラムを曜日ごとに行っている。対象者は長期欠席中の小中学生だ。時間は11:00から15:00の間で1コマ60分である。年単位で利用する子供もいるが回数チケットを購入し、行きたい時だけ行くとしている子供もいる。授業料は、入学金が10,000円、校費が年間で10,000円となっている。年単位で利用する場合は、入学金と校費にプラスして授業料が年間で200,000円かかる。回数利用の場合は、入学金と校費に加え、25回分で30,000円になる。フリースペースでの自由時間では、本やマンガを読んだり、パソコンを使ったり、卓球をしたりと自由に時間を使うことができる。

富山YMCAではフリースクールとフリースペースのどちらも併用して利用する子供が多いが、初めはフリースペースのみで慣れてきてからフリースクールを利用することもある。

第二節 学校法人国際学園 星槎国際高等学校富山学習センター

星槎国際高等学校は、約 40 年にわたって多くの子どもたちと関わってきた星槎グループ・学校法人国際学園によって 1999 年に開校された広域通信制高校である。北海道芦別市の本部校と全国の「学習センター」で大学や専門学校への進学、高卒資格の取得、就職、留学、転編入、不登校、自立支援、特別支援まで、様々なニーズに対応するカリキュラムを用意し、共生社会の実現を目指している。

星槎高校は通信制ながら、週 3 日～最大 5 日登校することを基本としている。これは、対面授業や「関わり合い」を大切に、子どもたちの居場所を作り続けてきた星槎ならではの学習システムである。自分の状況や目的に応じて登校スタイルを選択することができ、中には月に 1 回しか登校しないコースもある。いずれの通学スタイルでも 3 年間の在籍と 74 単位を取得すれば卒業できる。現在富山学習センターの生徒数は 120 人ほどで、約半分が週 3 日のコースで通っている。クラスは 1 年生が 2 クラス、2,3 年生は 1 クラスで、大体 10 人から 15 人の生徒が在籍している。

学費は、入学金の 20,000 円に加え、毎年施設設備費の 50,000 円、授業料の 375,000 円、体験学習費の 60,000 円が必要となる。

授業は一コマ 50 分で講義形式の授業やグループワークなど様々なものがある。特徴の一つにゼミ授業がある。これは個人の興味に合わせて自由に選択できる授業で、興味のある分野で体験的に学びながら将来の進路選択の際の指針にすることを狙いとしている。ワード・エクセルの基礎を学習し、ワープロ検定・表計算検定の合格を目指すパソコンゼミや仕事をするために必要な体力、作業の仕方、考える力を養うためのジョブトレーニングゼミなど様々なものが開講されている。週 3 日コースは学年登校日 1 日に加え、残りの 2 日間は参加したいゼミが開講される日に登校すればよい。学年登校日は 1 年生は火曜日、2 年生は水曜日、3 年生は木曜日に設定されている。週 4 日以上登校する場合は、ゼミ授業を追加するかたちになる。例として週 3 コースのスケジュールを表 2 に示す。

表 2：星槎国際高等学校週 3 コース例

	第一登校日	第二登校日	第三登校日
	火	木	金
10:00	ホームルーム		
10:20	1限：理科	ゼミ授業 「学習」	ゼミ授業 「コミュニケーション」
10:40	2限：国語		
12:10	昼休み		
12:50	3限：数学	ゼミ授業 「PC」	ゼミ授業 「アトリエ」
13:30	4限：情報		
14:40	清掃		
14:50	ホームルーム		

星槎高校は 2 学期制で入学は 4 月と 10 月があり、4 月入学の場合は 3 月卒業だが、10

月入学の場合は9月卒業になる。9月卒業は半年間ずれることになり、卒業後就職する人は中途採用で職を探し10月から働くという形になる。しかし、中には学費を払いながら半年間在籍し、3月に卒業する人もいる。また転入生や編入生は随時募集しており、現在120人のうち60人が転校生である。そして毎月2、3人は必ず転・編入生が入ってきている状況である。

生徒は富山県の人ほとんどで富山市内のみならず、入善町や朝日町、南砺市といった遠方から来ている人もいて、約1割は岐阜県から通っている。不登校を経験した人が一番多く、また対人トラブルや人との関わりが難しい人、発達に偏りがある人、非行化傾向がある人など様々な人が通っている。さらに、以前は別の高校に進学したが勉強についていけず、留年して星槎高校に転校してきた人もいる。

富山学習センター内に小学1年生から中学3年生を対象としたフリースクールとしてNPO法人星槎教育研究所ふれあいフリースクール「せいさ☆ういず」が併設されている。せいさういずは、安心できる居場所を提供し、人との出会いや多くの体験を通して自信をつけ、未来を切り開くきっかけを作る場所である。定員5人のところ現在3人が通っていて、小学生2人と中学生1人だ。いずれも不登校の子供たちである。火曜日から金曜日の朝9:30から12:30まで開講していて好きな時間に来ることができる。活動内容は自由で本人の気持ちを最優先に、相談しながら決めている。年会費は無料で1回1500円である。

第三節 NPO 法人ワンネススクール

ワンネススクールでは、フリースクール、ワンネス高等学院、親の会、就労支援、寄宿寮、シェアハウスを運営している。ここではフリースクール、ワンネス高等学院、寄宿寮について解説する。ワンネススクールのフリースクールは一般名称のフリースクールと区別してワンネスフリースクールと表記する。

ワンネス高等学院は通信制高校サポート校である。サポート校とは、通信制高校に通う生徒が3年間で卒業ができるよう、単位取得・進級などの支援を行う民間の教育施設のことである。通信制サポート校は通信制でありながらスケジュールリングや学習のサポートを行い、卒業の手助けを行う。通信制高校サポート校であるワンネス高等学院では、卒業資格だけを提供するところではなく、日々の活動の中で人との関わり、社会との関わり、思いやりや、仲間との切磋琢磨、自分自身と向き合ったりといった、その若者自身がいきいきと生きていけるようになることを大きな目標としている。教育方針としては、「なんでもやってみよう!」、「失敗は成功への第一歩!」、「みんな違っていい!」の3点を掲げている。

現在3年生が2、3人在籍している。開校して数年は毎年十数人の生徒がいたが、卒業資格をもらいたいというだけの生徒が増えてきて、働いていく力をつけてほしいという学校の目的と異なると森さんが感じたため、現在は学校の宣伝をやめ自分から活動する意思がある生徒だけで運営をしている。転入編入生はほとんどおらず、中学生のころから不登校の生徒が入学してくるパターンが多い。3年生が卒業し来年から生徒がいなくなるため、新たに生徒が入学してきた場合フリースクールと一緒に活動を行い、柔軟に対応していきたいとしている。進路はだいたい進学と就職が1対1の割合である。

ワンネスフリースクールでは、現在は18歳くらいの生徒が5、6人在籍している。年齢は年度によって異なり、14、15歳が多い年もある。入学してくる生徒に合わせて柔軟にカリキュラムを変えて対応している。勉強をやりたい生徒が多ければ森さんが授業を行う。講義形式の場合もあれば個別に指導することもあり、場合によってさまざまである。授業料は月4万円。教育理念として、基礎的な学力を身につけてほしい、人の役に立つ人間になってほしい、健全な身体の中に豊かな心が育んでほしいというものが掲げられている。

スケジュールはワンネスフリースクールとワンネス高等学院と同じ日程で行われている。表3にインタビューの中で確認した活動スケジュールを示す。

表 3 : ワンネススクールスケジュール

	午前	午後
月	料理	学習(フリータイム)
火	ボランティア(清掃)	学習(フリータイム)
水	野外活動	
木	ディスカッション	体育
金	学習(フリータイム)	

学習の時間では、高校生は通信の課題のレポートをしていることが多い。フリースクール生は、ギターを弾いたり絵をかいたりと自由に時間を過ごしている。金曜日は一日フリータイムになっている。学校を卒業したら自分で時間をコントロールする必要が出てくるので、その練習のため自由時間を設けている。

火曜日のボランティアの時間では、近所の公園のトイレ掃除を行っている。最終的に働く力をつけてほしいので、実際に体を動かして働く練習を行っている。

水曜日の野外活動では時期により様々なことを行っているが、夏はだいたい畑で野菜を育てている。日曜大工や陶芸、染め物など生活技術に関することやアート活動などをすることもある。

木曜日の午前中のディスカッションは、毎週テーマを変えながら、そのテーマについて話し合う時間である。自分のことを自分で語れるようになることが目的で、自分の弱いところに自信をもって話せるようになれるようテーマを設定している。不登校を経験した子供は人の前で自分のことを語る事が苦手な場合が多い。そのため自分の考えを持ち、それを外に向けて発信することが出来るようになってほしいという意図がある。午後の体育の時間では、バレーやバドミントンなどを強要することなく楽しくできるように行っている。不登校児童は運動に苦手意識がある子供が多いが、勝ち負けにこだわらず楽しく体を動かすことに重きを置いているため、運動を好きになる子供が多いようである。

里山の寄宿寮みんなの家は、石川県白山市の旧鳥越村という田んぼや畑のある自然豊かな土地にある。2013年4月に開所され、2016年度までは4人利用者がいたが、現在は1人のみ利用している。フリースクール生や高校生が期間限定で利用することもある。親と離れて自活することが主な目的で、食事を作ったり洗濯をしたりと自分で生活するスキルを身につけていく。日々の活動はワンネススクールの活動に準じることが多いが、地元の学校に通いその地域でアルバイトをすることもある。

第四章 分析

今回調査したフリースクールには、それぞれ共通する点と異なる点を発見することが出来た。多様な個性を持つフリースクールが、不登校の子供の居場所となり得ている要因と、フリースクールが既存の学校教育に対しどのような関係を持っているかの 2 つの側面から分析を行った。

第一節 受け皿としてのフリースクール

在籍する学校に通わずフリースクールを選択する生徒は学校に不満を持っていたり、人間関係に問題を抱えてしまった場合が多い。そのような生徒の受け皿としてフリースクールは存在している。なぜフリースクールは受け皿となりえているのか分析を行う。

第一項 開放的な雰囲気

どのフリースクールにも共通して言えることは入りやすいということである。調査の際、完全な部外者の筆者が入ってもじろじろ見られることもなく、良い意味で空気のようになじむことができた。生徒も筆者を意識することなく生徒同士会話をしたり、カードゲームを続けたりする姿が見られた。

この空気感は学校にないものだと感じた。多くの小中学校は、部外者がほとんどくるとの閉鎖された空間のため、それが息苦しいと感じる生徒もいるだろう。そういった生徒の受け皿として存在し、それが定着の要因の一つなのかもしれない。

第二項 居場所と親子関係

せいさういずでは一対一で職員が生徒と関係を築けるため、不登校であった生徒も安心して通う居場所になることが出来ているようだ。しかしせいさういずに通うことが出来るようになった後でも学校に対する恐怖心はなかなか克服できないようで、放課後学校に顔を出してもすぐ怖いと言ってせいさういずに帰ってくる。

学校復帰がなかなか実現しなくても行く場所があるというのは、本人にとっても親にとっても大きなことである。以下は母親が、子供がせいさういずに通うことに対してどう感じているかについての語りである。

高野：星槎に来てフリースクールで頑張って、自分を見つけるというか、そういうわが子を見てお母さん自身もその自信を得たりとかなんか学校がすべてじゃないんだみたいな、そんな風に思ってお母さん自身が安心される。

子供が不登校になることで母親も学校に行かせなければという義務感や苦しみを感じている。そのような状況でせいさういずという居場所が出来、学校以外で毎日いける場所があ

るのは親にとっても安心できることである。上記のような語りはYMCAでも見られ、居場所があるということは子供にとっても親にとっても大きな意味を持つことがわかる。

ワンネススクールでは、居場所としてフリースクールを利用するだけでなく、親と子が離れて生活しお互い自立するといったことも重要視しており、寄宿教育を推奨している。以下は不登校の子とその親の関係についての語りである。

森：特にほら、登校問題ってだいたい家族関係壊れる。親御さんは喧嘩するしき。やっぱりそこにいるよりかはいっぺん、離れて、お互い親と子供距離を持って活動することで、やっぱり元気になってく率が全然早い。ほんとは寄宿寮にみんなどんどん入ってくれれば一番、ね。

以上のように森さんは、一度親と離れ親と子が互いに自立した関係になることが大切だと考えている。

ワンネススクールでは寄宿という選択肢を用意し、より親と子が離れる環境を重要視していたが、他のフリースクールも不登校の子供が昼間フリースクールに通うことによって結果的に親と子が距離を置くことが出来ていた。このことからフリースクールに通い、親と子が距離を置くことによって、結果的に親子関係の改善につながるということがわかった。

第三項 教師と生徒の関係

フリースクールにおける先生と生徒の関係は非常に重要なもので、学校の先生とは異なった生徒の理解者になることが必要だ。そしてその結果その後の人生にまで影響を与える存在になることもある。

そのようなその後の人生に焦点を当てて教育を行っているのがワンネススクールである。ワンネススクールでは、学校教育の主な目的とされている勉強を、あまり重要視していない。10代後半への知的な刺激も大事だとも述べていたが、生徒自身が勉強に意欲がないのにすることはないそうだ。しかし受験をすることを決めた生徒がいれば、その生徒に合わせて個別に指導を行うことはある。

就職を選んだ生徒はもちろんだが、進学を選んだ生徒にもその先にある、働くということについてイメージを持って卒業して行ってほしいと森さんは考えていた。森さんは働くということを単純にお金を稼ぐための労働とは捉えてはいなかった。以下はそれについての語りである。

森さん：ただね、働けるちゅうのはお金稼ぐ働きじゃなくて「端（はた）」を楽にするという意味で、周りを楽しくできる。周りを楽にできる、動きをできるようになれば社会でね必要とされる人になるかな。

以上の語りから森さんは、自分だけお金を稼いで生きていくのではなく、周囲の人の助けになり社会に必要とされる働きをしてほしいと考えている。自分が良ければ良いという考えではなく、みんなで元気に幸せになるという考えを生き方の中心に置いてほしいと言っていた。

その考えのもと、ワンネススクールでは卒業してからのつながりも大切にしている。以下は、森さんに卒業生との関わりについて訊ねた際の語りである。

森：だいたいみんな社会にね、ここでちょっと元気になって社会に出て、で20代後半になったら次どう生きるかで次悩む。その時にもう一回来てもらって、そんとき関わって、ほんとの卒業かなと思ってる。

以上のようにワンネススクールでは学校という機能の垣根を超え、卒業してからの生き方についても関わっていつている。これは在学中に単純な教師と生徒という関係ではなく、信頼のおける師としての役割を持つことが出来たからである。

第四項 友人関係の変化

星槎高校では半数以上の生徒が転編入生であり、前の学校から転編入する理由として人間不信があげられた。そのため人間関係の変化は要因の一つになりうる。以下は星槎高校の高野さんの語りである。

高野：人を認めるってところに関しては、やっぱり同じ境遇であるっていうことと、やっぱり痛みが分かり合える環境であるので、その、お互いを認め合えるってところを大前提に、同じ星槎の仲間として一緒に、お互い共感し合いながらやっていきましょうっていうところなんで、そういう部分ではこう、仲間づくりをしやすい環境であると思います。

以上の語りから、同じ境遇の生徒が多いことから共感し合い友人関係を築きやすいという点があることがわかる。生徒同士の関係が親密であるから登校したいと感じているのか、登校日数が少なくなり関わりが希薄になったから対人トラブルが起こらず登校することが可能になっているのかは次項で分析する。

第五項 個性の容認

星槎高校の10周年節目に発行された「10年のあゆみ」（星槎国際高等学校富山学習セン

ター、2014) に掲載されている卒業生の言葉に注目する。当時小中学校と不登校であった土田さんは、星槎高校の学校説明を聞きに行った際、机を片付けた教室で体育をしている様子を見てなじみやすさを感じ入学を決めたそうだ。入学後は自分から行事を計画したり、文化祭を友達や先生と協力しながら作り上げたりと充実した学校生活を送っている。本人も高校生活を「一生忘れることのできない大切な思い出」と語っている。このように土田さんは、最初は雰囲気入学を決めたが、友人や先生との出会いによって継続して星槎高校へ通うことが可能になった。

しかし、全員が土田さんのように学校行事に思い入れがあり、友人とのかかわりが充実したものであったと感じているわけでもない。同じく「卒業生のあゆみ」から中学校不登校を経て星槎を卒業した又江さんの言葉を引用する。

今考えてみると星槎は心のリハビリであり、通過点であったように思います。進学した短大では自信を取り戻し、社会に出てからは胸を張って歩けるようになりました。高校時代の思い出はあまり思い出すことができません。しかしそれもまた一つの在り方なのかなと思っています。

以上のように又江さんは星槎高校での日々を通過点としている。先生との距離が近いところを長所として挙げてはいたが、生徒同士のかかわりに関しては触れられていない。可もなく不可もなく穏やかに過ごすことができたことが嬉しいと述べており、前述の土田さんとは異なる学校生活を送ってきたことがうかがえる。

このように同じフリースクールに通っている二人でも全く異なる学校生活を送っていることが分かった。だが、結果としてはどちらも星槎高校に定着し、卒業することができている。

その要因として考えられるのが、教師との距離感である。土田さんのような生徒に対しては、授業外でもかかわり行事の計画をともに行うこともあるが、又江さんのような生徒に対してそれを強要することはない。生徒がどのような考えを持っていてもそれを否定せず、耳を傾けることができていることから、どのようなタイプの生徒も継続して星槎高校に通うことができているのだ。

第六項 まとめ

これまでの分析をまとめると、フリースクールの居心地の良さには大きく分けて 2 つの要因が存在する。1 つ目は場所的な要因で、フリースクールという空間の居心地の良さである。今回調査したどのフリースクールも誰もが入りやすい開放的な雰囲気を持っていた。これは部外者が入れない学校とは大きく異なる部分である。進路についても勉強を強制されることはなく、自分に合うレベルの勉強を自分の意志ですることが出来る環境であった。

2つ目の要因は人間関係についてで、学校とは異なった人間関係が居心地の良さをもたらしている。まず生徒と教師の関係についてだが、卒業してからの生き方についてまで関わろうとする姿勢が見られ単純な先生と生徒といった関係ではないことが分かった。学校に不信感を抱き不登校を経験した生徒には、より深くかかわることのできる教師が必要になってくるのかもしれない。しかし生徒の個性によって教師の対応は柔軟に変化している。フリースクールには、積極的に人と関わり学校生活を充実させたいと考えている生徒もいれば、静かに穏やかに過ごしたいと考えている生徒もいる。そのどちらも否定せず、認められるような環境が備わっていた。学校ではみんなで同じことを同じようにしなければいけないので、それに息苦しさを感ずる生徒にとっては、フリースクールの教師との関係は居心地の良いものとなっているのだと考えられる。親子関係についても、不登校の生徒が居場所を見つけたことにより、親が安心し学校の教師以外にも相談できる人可以るので、親子関係の悪化を防ぐことができることが分かった。親が子供を学校に行かせなければと自分自身を追い込んでしまうと、子供も学校に行けないことにとらわれ、悪循環に陥ってしまう。フリースクールという居場所があることでそれを解消することができる。

以上のような要因からフリースクールの居心地の良さは生まれている。フリースクールという空間と人間関係は学校とは異なったものである。学校とは異なった場所として居心地の良さを持つフリースクールは、学校に行くことができない子供の受け皿として必要とされている。

第二節 既存の教育制度との関係

今回調査した 6 つのフリースクールでは、それぞれ異なった目的意識のもと組織を運営していた。小中学生を対象としたフリースクールでは、生徒が在籍する学校と形式上は並行してフリースクールに通うことになる。そのため学校に対する自身のスタンスに関しては特色が見られた。各フリースクールの取り組みやカリキュラムに着目し学校との関わり方や考え方を明らかにしていきたい。

第一項 在籍小中学校との連携

まず、生徒が在籍する小中学校との連携の取り方に違いが表れていた。以下は YMCA の上村さんに在籍生徒の小中学校との連携について尋ねた際の語りである。

上村：こっちからはただたんに塾、塾行くじゃないみんな。中学校の時とかの塾のお昼バージョンみたいな感じだから、特にアプローチはしないんだけど、中学校の場合は学校の先生がやっぱり、まだ義務教育中だから、学校行ってなくても責任があって、アプローチをされる。

YMCA は自分からアプローチすることはなく、学校側からのアプローチに応じて出席の情報を送り教師が様子を見に来た場合はそれに対応するといった形をとっている。塾のお昼バージョンという語りから YMCA は勉強をするところだという認識が強い。実際勉強のカリキュラムを多く取り入れ、学習面の不安を減らそうとしている。

対してせいさういずの高野さんは連携をとっても重要視していた。以下は高野さんの語りである。

高野：やっぱり情報共有は絶対必要だし、連携も必要になってくるので、なんかそういうのはうち、強味というか、できているかなとは、たぶんここまで丁寧にやってるところってあんまないと思うんですけど。

語りからわかるように情報共有を重要なものと捉えていて、月に 1 回は必ず学校に訪問し、生徒の様子や母親との面談の結果、進学にあたってどのような準備をしていくべきかなどを校長や担任と話し合っている。さらに以下の語りから高野さんの学校復帰に対する想いが読み取れる。

高野：学校に行ければまあ一番ね、一番て言い方もあれだけどでも、幸せになりやすいというか、そういう選択だと思うんです。

この語りのように高野さんは「幸せになりやすい」という表現をしていた。現状学校の

代わりにフリースクールに通うという選択はメジャーではなく困難なことも多い。だからこそ高野さんは学校復帰させたいという思いが強いのだと思う。

よってせいさういずでは学校復帰を第一に考えフリースクールをその前段階として考えているため、学校との連携に力を入れ情報共有を大切なものだと考えている。勉強をすることよりは「元気になる」ことに重点を置いていることがわかる

第二項 学校との関係

YMCA の上村さんにフリースクールの位置づけに関してどう思っているか尋ねた際、「学校ほくないのに、学校にしてくれたら最高にいいと思う」と語っていた。この語りには、フリースクールの自由な雰囲気は学校にはないものだから、それを残したまま学校として認められたいという思いが込められているのではないだろうか。しかし現状、中学生が毎日 YMCA に通うと月に 4 万円程度かかり授業料を払うことが難しい子供は受け入れることができない。以下は上村さんの語りである。

上村：やっぱりねーお金かかるからね、来れない子いっぱいいる。フリースクール誰でも来ていいよーって言うけど、じゃあお金ない子でも来れますかっていって、受け入れられないじゃない。だからほんとにはもっと受け入れてあげなきゃいけない子とかはいるなと思う。

この語りから上村さんは、お金がかかるからフリースクールに来ることができない子供がいることに悩んでいることがわかる。そのため補助金を得て授業料を安くすることができたらいいと述べていた。その結果学校と対等の存在になることを求めていると言えるだろう。

一方せいさういずの高野さんは、フリースクールは学校ではないという確固とした意志がありフリースクールは一時的な居場所であって学校復帰の前段階だと捉えていた。以下はフリースクールの位置づけについて尋ねた際の語りである。

高野：フリースクールに関しては学校ではないので、結局学校ではない居場所としての私の認識なので、フリースクール行ったからといって高認は取れませんし、ほんとに居場所機能という形でフリースクールで元気になって、小中学校であれば学校復帰。

以上の語りから、フリースクールを一時的な居場所として学校復帰を目指したいと考えていることがわかった。まずフリースクールで元気になってから適応指導教室¹、学校とつなげていきたいと考えている。それぞれが自分の役割を認識し、生徒をサポートする体制が整うことが重要であると言っていた。

次にワネスクールでは、学校へ行くことに関して以下のような語りがあった。

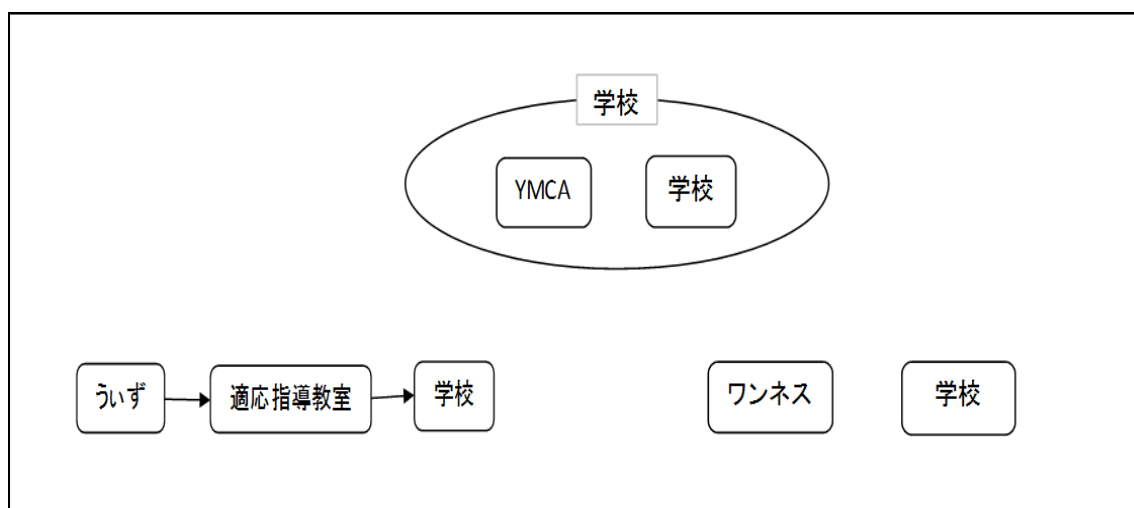
山浦：学校行きなよみたいな感じはないですか？

森：そういうところはあるかな。それよりかまあ、活動しようぜちゅう感じ。まあ学校は活用しろよとは言う。体育館はただであるし、いろいろできるし。

以上の語りから学校に行くということはあまり意識していないように感じられる。

以下は 3 つのフリースクールが学校に対してどのような関係性を持っているかを図式化したものである。

図 1 3 つのフリースクールの学校との関係性



YMCA は学校というシステムの中で、学校と同じ権利を持ち、通う生徒の不利益がなくなれば良いと考えている。そのため制度化を求めているタイプのフリースクールであるといえるのではないだろうか。対して、ワネスクールでは学校というシステムへの加入は求めている。学校とは異なる組織として成立しているという認識である。せいさういずも段階の一部としての機能が果たせば良いと考えているため制度化を求める気持ちは少ないと言えるだろう。

第三項 進路について

進学・就職に関しての方針についても異なりが見られた。まず YMCA では、カリキュラムが勉強中心で塾型のフリースクールであるためか、基本的には進学を目指すことになっている。エスカレーター式で進学はできないので、進学を選ぶ場合新たな環境を目指し受験をする必要がある。次にせいさういずについては学校復帰が第一であるためすぐにでも学校に戻りたいという想いが前提にはあるが、それが叶わない場合星槎高校への進学とい

う道も提示されている。その場合今までと同じ場所に高校もあるし、教師も同じ人がいるので、生徒にとっては選びやすい進路になるのではないかと思われる。

しかし、ワンネススクールではそれと異なった考え方をしていた。基本的にはフリースクール生がそのままワンネス高等学院へ進学することは認めていない。森さんは自立したフリースクール生になってほしいと思っているので、場所も教師も同じという新たな刺激が少ない環境に居続けてほしくない。まだ生徒が別の環境に進学することや就職をする決意ができない場合は、もう 1 年間フリースクールで力をつけさせてから進学や就職を選ばせてあげたいと考えている。

環境が変わらないということは生徒にとって新たなことに挑戦しなくていいため比較的気楽な選択肢になりうる。以上 2 つのフリースクールではエスカレーター式の進学を認めるか認めないかの差が生じていた。

第四項 まとめ

この節では、既存の学校教育に対し、どのような教育を提供しているかということを中心にあてて分析を行ってきた。今回調査した 6 つのフリースクールは学校に対して縦の関係と横の関係があるように感じた。まず縦の関係については、進学就職に関してのスタンスの異なりである。せいさういずでは星槎高校への進学という道も提示されていたが、ワンネスフリースクールでは、ワンネス高等学院への進学は認められていなかった。どちらのフリースクールも同じ団体に進学先を持ってはいたが、その活用の仕方は異なっている。

次に横の関係については、既存の学校教育に対するフリースクールという関係である。図 1 にあるように、YMCA は学校というシステムの中で同じ権利を持ち、現在ある生徒の不利益をなくしていきたいと考えている。そのため横のつながりとしては、互いに等しい関係になってくる。せいさういずでは、フリースクールを段階の一部として位置づけフリースクールで元気になり、適応指導教室、学校とつなげていきたいと考えていた。横のつながりは、図 1 のように矢印で結ぶことができる関係で、フリースクールは学校復帰の前段階という認識である。ワンネススクールは、学校教育とは異なる組織として、子供に居場所を提供できれば良いという認識であった。そのため横のつながりはなく、既存の学校教育とは違う独立した存在であるといえるのではないだろうか。

第五章 考察

第一節 フリースクールの多様性

藤田（2002）によるとフリースクールは、居場所型、塾・予備校型、外国のフリースクール型の3つに分類することができた。しかし今回の調査を通じてすべてが藤田（2002）の分類に当てはまるわけではないと感じた。まず今回調査したフリースクールには小中学生を対象としたフリースクールと高校生を対象としたフリースクールが存在していた。これら2つは同じフリースクールという呼び方をされているが役割は異なる。小中学生を対象としたフリースクールでは、在籍する学校の代わりに登校し、単位の置き換えをもって卒業するという仕組みが一般的だ。対して高校生を対象としたフリースクールでは、フリースクール単体で高卒という資格を得ることができる。フリースクールという名称ではあるが、私立の単位制や通信制の高校と同じ扱いである。そのため高校生を対象としたフリースクールでは居場所型というものは存在しないのではないだろうか。もちろん星槎高校もワンネス高等学院も居場所機能を兼ね備えていたが、居場所機能単体としては当てはまらない。高校生を対象としたフリースクールでは、卒業し進学か就職をすることが目的となっているため「癒し」や「休憩」といった役割だけでは存在していない。よって小中学生を対象としたフリースクールは藤田（2002）の分類が当てはまるが、高校生を対象としたフリースクールには当てはまらないことが分かった。高校生を対象としたフリースクールでは、居場所型単体のフリースクールが消滅し、塾・予備校型と外国のフリースクール型に吸収されていくのではないだろうか。

以上のことを踏まえ6つのフリースクールを藤田（2002）を参考にし分類する。藤田（2002）の分類によるとYMCAはフリースクールなら「塾・予備校型」、フリースペースならば「居場所型」とすることができる。フリースクールでは学習面の不安をなくし学校復帰につなげることができている。もし仮に学校復帰が叶わなくとも学習に力を入れたカリキュラムのため進学することは困難ではない。学校とは異なった組織として進学を目指すフリースクールだ。塾・予備校型のフリースクールは外国のスクール型と対をなすもので独自の教育を行わないということも藤田（2002）と合致している。YMCAではフリースペースとフリースクールを併用して利用する生徒が多いことから、居場所機能を兼ね備えた塾・予備校型と言えるだろう。

しかし、藤田（2002）によると塾・予備校型は、学力を重視した塾や専門学校などが「フリースクール」を名乗っている場合も多いため、学力重視の考え方が中心になっているとされている。この点はYMCAと相違する点である。YMCAカリキュラム的には教科学習が主で学力を重視したものになっているが、実際は生徒の実力に沿って授業を選べるため画一的に学力重視というわけではない。フリースペースも兼ね備えていることから居場所機能もあり、学力重視という考え方とは異なるのではないだろうか。

続いて星槎高校も「塾・予備校型」と言えるだろう。星槎高校は通信制の学校ではあるが、週3日通うコースが半数を占め登校日数は多い。通信制・単位制の私立学校であり、

より学校に近い形となっている。そのため小中学生を対象とした「塾・予備校型」とは異なる。小中学生を対象としたフリースクールは既存の学校教育と同じ立場にあり、学校の代替的なフリースクールであると言えるが、星槎高校のような私立高校は単体として存在し学校の代替的なものではない。より学校に近い存在であり、公教育化が進んだ形であると言えるだろう。

せいさういずを藤田(2002)に沿って分類すると「居場所型」と言える。藤田(2002)によると、居場所型の特徴として挙げられるのが、学校に行かない子どもの交流や学習の場所で、「癒し」や「休憩」といった役割があると述べられている。せいさういずは決まった教育を施すわけではなく、子供の居場所を作り、学校復帰の手助けをすることを目的としている。なので「癒し」や「休憩」といった役割は果たしているといえるだろう。交流や学習については「癒し」や「休憩」を妨げない程度に行われる。

次にワンネススクールはワンネスフリースクールとワンネス高等学院ともに、藤田(2002)の分類だと独自の教育を行う「外国のフリースクール型」に分類できるのではないだろうか。この外国のフリースクール型は藤田(2002)では独自の教育を行う学校であるとされている。学校教育とは異なる教育を提供し、学校教育の批判とも捉えられるということだ。この「独自の教育」というものを藤田(2002)はアメリカやドイツなどのフリースクールを参考にしていることと定義している。アメリカやドイツのフリースクールの大きな特徴の一つは、生徒が自分の時間をどう使うか自由に決められるという点だ。その他規則なども生徒同士が話し合いや投票で決定する。

ワンネススクールでは、フリータイムがあり自分で何をするか決める時間があるため、一致している部分もあるが、完全に同じ教育方法というわけではない。日本で運用しやすいように制度を取り入れているのではないだろうか。

以上のように6つのフリースクールを分類することができた。それぞれ教育方針に異なりがあり、フリースクールの多様性を確認することができた。

第二節 フリースクールの制度化の是非

フリースクールの制度化は今、是非が問われている。先行研究で制度化の問題点として大きく分けて3点が挙げられていた。まず一点目は田中（2017）で解説されていた、障害児の普通学級への参加を求める障害者運動の中で、フリースクールの制度化が子供の分別につながるという批判があるということである。今ある養護学校や特別支援学級のように子供を区別することにつながりかねないので、子供を区別するのではなく、普通学級を誰もが通える場所にすべきだという主張がされていた。この主張に関しては田中（2002）のインタビューで東京シュール代表の奥地恵子が述べているように、既存の学校で子供が苦しんでいるという事実がある以上制度化の推進は必要であるように思う。子供のニーズに合わせ多様な居場所を認め、その選択が子供の不利益にならないようにすることが大切なのではないだろうか。制度化を進める際、より平等な選択肢に成り得るように制度化を進めることが必要であると思う。

次に問題点として挙げられていたのは、土方（2011）の義務教育中に既存の学校を選ぶかフリースクールを選ぶかの選択に迫られるという点だ。その選択肢を選ぶことができる一部の子供にだけ有利が存在し、教育の機会均等性が損なわれるという主張である。今すでに小中・中高一貫校や私立の小中学校が存在し、選択の有利不利は存在している。フリースクールに関しても現状二重学籍問題や金銭面で通うことが難しい子供がいるので、制度化によりそれが解消され、今よりは選択の有利不利はなくなるのではないだろうか。

フリースクール内で公教育と公教育外の二分化が生じ、公教育化を望まないフリースクールが経済的な援助を受けにくくなることや、社会的な信用が得にくくなることについても同様で、現在より良くなる可能性があるのなら制度化を進めていくべきだと思う。

これまでの調査でフリースクールには学校とは異なった居心地の良さがあり、それを必要とする子供がいることが分かった。しかし現在のフリースクールには様々な問題点がありまだまだ選びやすい選択肢とは言えない。実際せいさういずの高野さんも学校復帰したほうが「幸せになりやすい」と表現していた。しかし学校という1つの空間にすべての子供が適応し、個性を生かした教育を受けるのは難しい。学校とは異なる多様なフリースクールがあることにより、様々な個性を持つ子供が受け入れられている。制度化を進めることにより、フリースクールという選択肢を選びやすいものとし、選択で不利益を被らないようにしていくべきだと思う。

参考文献・URL

- ・王美玲、2011、「フリースクールの学校化プロセスと展望—不登校特区への転換と教育理念の実践—」、やまぐち地域社会研究、9、183-194
- ・王美玲、2014-03-31、「フリースクールの転換と不登校特区のカリキュラム」やまぐち地域社会研究、11、15-26
- ・田中佑弥、2016-12-25、「日本における「フリースクール」概念に関する考察—意識としての「フリースクール」とその濫用—」、臨床教育学論集、8、23-39
- ・田中佑弥、2017-03、「フリースクールの制度化に関する考察—不登校支援のあり方をめぐる論争を中心に—」、臨床教育学研究、23、13-22
- ・土方由紀子、2011-03-01、「フリースクールの公教育化についての検討：「多様化」言説の陥穽」、奈良女子大学社会学論集、18、197-212
- ・藤田智之、2002、「フリースクールの類型化と問題点」、佛教大学大学院紀要、30、93-107
- ・星槎国際高等学校富山学習センター、2014-4、「10年のあゆみ」
- ・文部科学省、2016-06-07、「不登校への対応の在り方について」(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/021.htm)

i 市町村の教育委員会が、長期欠席をしている不登校の小中学生を対象に、学籍のある学校とは別に、市町村の公的な施設のどこかに部屋を用意し、そこで学習の援助をしながら本籍校に復帰できることを目標に運営している教室。